

不登校に思う（その 3）

不登校に思う(その 1)(その 2)で子ども達の声をお届けしましたが、(その 3)では、一応まとめてみたいと思います。

不登校の子どもを持つ親とかかわって、その苦しい胸の内を聞くにつけ、何かの手助けはできないかという思いが強くなります。そして、多くの親に次のような共通的な悩みがあることがわかってきました。

- ① うちの子がどうして、このような状態になったのだろうか
- ② 私の子育てのどこが間違っていたのだろうか
- ③ どうすれば不登校の状態が解決されるのだろうか

このような言葉は、不登校、ひきこもり、昼夜逆転、無気力などの行動をとる子どもの多くから「悲痛な言葉」として聞き取れます。

そして、これらの言葉は親として当然と思います。しかし、このことを何回言っても解決しないのも事実です。それは、親の価値観で判断しているだけであって、単なる親の嘆きです。子どもの目線に立っているとは言えないのではないかという思いが強くなりました。

このような思いを親が持つ限り、子どもは「自分はだめな子どもであり、親は全く理解してくれない」と思うようになります。ここで、思い切って子どもを本気で受け止めることです。時間がかかります。ここで親が受け止めることによって、事態は必ず好転します。子どもは本能的に自分が受け入れられたと感じたら安心します。この安心が子どもを自ら立ち直らせるのです。ここで親の口から「これから一緒にやり直そう、私達(親)も心を入れかえて出直すから」と本気で言い、実践することによって子どもの気持ちはずいぶん変わります。

では、子どもの本心はどこにあるのか、不登校の子ども達と接していると、次のような事に集約されます。

不登校の子どもは、

- ① ほんとうは、ものすごくさみしがっている
- ② ほんとうは、親に認められたがっている
- ③ ほんとうは、だれかに(基本的には親)に自分の本心を聴いてもらいたがっている
- ④ ほんとうは、くつろげる家庭をもとめている

このような思いを持っているわが子の本音に気づき寄り添うことによって、親子の関係が激的に変わっていくことを私はたくさん体験しました。

親も子どもと同じように(あるいはそれ以上かもしれません)人知れず心が満たされない思いをもって生活しておられることがわかります。親が思えば思う程に子どもは逆方向に向いて、反抗を繰り返すでしょう。そのことが耐えられなくなり、ついに感情的になって親子の関係が悪化する。この繰り返して、毎日を過ごされている親が何と多いことか。相談に応じながら、心を痛めます。どうにかして苦しんでいる親と子供の本音をつなげていくことができないかと私も心を痛めています。そして、この本音がつながらなければ前進はないのです。わが子を信じましょう。

翔学館の川原先生方と力を合わせて、急がず、じっくりと取り組みましょう。私も力いっぱい応援します。

牛島 達郎

